

彙報

史學研究會大會

第一日は十一月二十一日午後一時より京都帝國大學樂友會館大講演場に於て開催、左の三氏の講演あり、引續き例年の如く評議員の改選を行ひ、新たに藤田元春・小牧實繁兩氏が加へられた。

ビスマルクの外交に及ぼせるプロシヤ後宮の影響

文學士 時野谷常三郎氏

プロシヤ國王ウイリヤム一世は、ビスマルクの獨逸國家の統一と云ふ理想に同意してゐたのであるがその後宮と姻戚關係にある奧・露・英三國が巧みに後宮をあやつた爲、王の理想實現の決意はにぶらされた。云々。

日本文化の東北進展について

文學博士 喜田 貞吉氏

我那の石器時代が何時迄下るものであるかの疑を解決しやうと數年來東北地方の古代文化を研究してゐたところ、大和民族の文化即ち所謂日本文化は逐時東北地方に擴がり、やがて全體を覆ふたのでなく、寧ろ飛びんに各地に及び、其地を中心に附近に傳へられたものであることが知られる。従つて山間遊地には今も尙アイヌの文化が残存してゐる。云々。

史研究に新しみを加へた點に多大の興味あるもので、先づ從來紹介譚刻された山家鳥虫歌に比較して氏所有に係る明和刊本の優れたものであることを云ひ、その成立、性質、他の歌謠集と比較して觀た得失等を論じ、更に同書に載せられた牧歌を通じて、民謠の最も根本的な屬性の一つ、即ち動き―傳波に關して力説するところがある。民衆の眼はむしろ常に内容よりも技巧に、内面よりも表面に注がれたと云ふ常識的な見解を再吟味して、學問的な必然に高めんとする氏の努力を窺ふべきであらう。

田中豊藏氏の「佛師定朝」は、定朝の傳記を整理し、作品を吟味穿鑿して、現存する唯一の彼の作品が鳳凰堂の阿彌陀如來なることを考證し、これと同堂扉壁の諸圖等との關係を考察し、鳳凰堂こそが當時の宗教觀念の最もよき藝術的具現であると斷する。未元の本稿が「定朝式の完成」「定朝の摸倣者」にもとき及ぼして更に其意を盡し、以て本邦造像史研究に資するところ多からんことを望む。菊版四七〇頁、定價三・〇〇、東京、刀江書院

〔吉田〕

松平定信について 文學博士 中村 孝也氏

定信が幼年より心身の修養に力めたことは驚くべき程のものあり、従来の學説を集大成し、これを實踐に移さうとした努力も亦多とすべきであるが、時世は急轉し、彼はその誠意にも拘はらず、反動的人物の頭目としての名を後世に残さざるを得なかつた。云々。

第二日はめぐまれた秋晴れに、午前は京都鹿ヶ谷住友男爵家別邸を訪ひ、有名な同家々藏の支那古銅器を見學し、午後は大阪城天守閣で開催中の豊公資料特別展覽會を見た。同展覽會は天守閣の再興を記念するために開かれ、大阪市が主催であつたので、各地から貴重な資料二百數十點が集まり空前の盛觀であつた。出陳品の主なるものは

- 御物 唐花軍配扇、後陽成天皇宸翰 仁義禮智信卷（堀江羅三郎氏藏） 豊公吉野花見和歌（伯爵伊達宗氏藏） 醍醐花見短冊（三寶院藏） 義演准后日記（三寶院藏） 豊公所用唐冠（保原潤治氏藏） 豊公所用卯の花威鏡（伯爵伊達宗氏藏） 葦穂文時給鏡（東京帝室博物館藏） 豊公太刀（子爵吉川元光藏） 黒塗桐時繪短刀箱（伯爵伊達宗氏藏） 豊公自筆書狀（十八通） 豊公遺言狀（公卿毛利元昭氏藏） 豊公宛印度副王書狀（妙法院藏） 印度副王宛豊公書狀案（富岡益太郎氏藏） 豊公等連署狀―未讀未領のもの（太田紅村氏藏） 北政所宛織田信長自筆書狀（土橋益兵衛氏藏） 片桐且元御藏前勘定書（荻村庄右衛門氏藏） 文祿檢地帳（富田町役場藏） 首取注進狀―大阪夏之陣（大阪市藏） 北政所自筆書狀（伯爵伊達宗氏藏） 加藤清正宛豊公軍

- 忠狀（赤田紅村氏藏） 西本願寺宛豊公書狀―北條征伐に關する（西本願寺藏） 同―葛津征伐に關するもの（向寺藏） 山中橋内書狀（組屋六左衛門氏藏） 大阪陣圖屏風（佐賀黒田長成氏藏） 同（東京帝室博物館藏） 醍醐花見圖屏風（土橋羅氏藏） 花見屏風（醍醐三寶院藏） 千鳥圖屏風（藤澤社藏） 柳水車圖屏風（同神社藏） 同 武川盛次氏藏） 文英清韓自筆方廣寺大佛鐘銘稿本（照谷良之氏藏） 銅金燈籠（北野神社藏） 扇面古地圖（武藏田治氏藏） 豊公畫像（伯爵伊達宗氏藏） 同（蓮華院藏） 同（妙興寺藏） 同（高臺寺藏） 大政所畫像（大徳寺藏） 北政所畫像（高臺寺藏） 豊國大明神々號（大徳寺藏） 同（大井武夫藏） 同（鈴鹿三七氏藏） 豊國神社舊記（同氏藏） 豊國社遷宮愚記（同氏藏）

●昭和六年度史學科關東及東北地方

研究旅行後記

昨秋行はれた京都帝國大學史學科の關東及東北地方の研究旅行は、その希望が以前から醸成されて居り大體の腹案が出来ても居た事としてその計劃成るや一日でプログラムが出来上つた程その慾求が強くあつた。一行二十六名、西田直二郎教授指導の下に、十月十一日夜から八日間限られた短時日の中に出来るだけ廣く多量な資料をば目指してこの旅行が行はれたのである。此處にその概略を載せて興味深く内容豊富だつた研究旅行の外貌を記する事とする。

第一日。十月十一日、約半数はすでに先發し、夕刻京都驛から出發するもの十四人に過ぎなかつた。

第二十月十二日（東大史料編纂所―内閣圖書寮―内

閣文庫―東大歓迎會―先輩歓迎會）

早朝六時東京驛着、本郷菊富士ホテルに小憩して直ちに東大史料編纂所に向ふ、建物は大學の構内図書館の一部にある。先づ所長辻善之助博士の史料編纂所の沿革並びにその事業に就いての説明を聞き、後陳列の史料を見る。鷲尾順敬博士の説明にて、楠木正成自筆法華經の奥書、明全（禪師）戒牒奥書、正平版論語の諸寫眞、次いで中村勝麻呂編纂官説明の川原慶賀筆和蘭かびたんプロムホフの畫像、其他實隆公記原本、大乘院寺社雜事記原本、山科家文書、信長自筆書狀、山陽自筆本等を見る。終つて岩橋小彌太編纂官の案内で、圖書館の各室を縱覽した。關東大震災後米國ロックフェラー氏の寄附により昭和三年に竣功したものである。午後は、宮内省圖書寮に行く、屋上庭園で、芝課長の圖書寮の沿革の説明があり次いで樹下快淳氏其他編修課の方々の案内にて見學したものは

尙書正義（宗判單疏本）

二十卷十七册

春秋經傳集解 古鈔本

三十軸

通典 宗刊

四十册

新撰字鏡 天治鈔本

十二册

日本國見在書目錄 古鈔本

一册

類聚符宣抄 保安古鈔本

八册

壬生家新寫古文書

四册

川路聖謨遺書（日記類二十三册雜書四十册卷物四卷）

等がある。其後書庫を觀、記念繪葉書等を藏いて、宮城庭内を横きり内閣文庫に向ふ、此文庫にては

日本舊事記 紅葉山本・光岡跋

東鑑 慶長寫本

本朝通鑑 正本

徳川實記 正本

徳川家列物帳 朱黒印

大乘院文書

年録 自弘化至安政

萬延日記 元・二年

日記草稿 文久二年

指華入京日記 慶應三年

行政官記 明治元年

二條城日記 同年

箴下日記 明治元年伏見長藩日記

東海道先鋒記 明治元年正一五

大阪行在所日記 明治元年

奥羽追討日記 同

蝦夷地戰爭日記 明治二年

陸軍裁判所記 同

東京府日誌 明治三・四年

集議院日誌 明治二・三年

等日を惹くと、ころであつた。夕刻、再び史料編纂所に到り、同

所内にて恒例に任せて東西兩大學史學科の交誼會が開かれた。東大からは黒坂勝美、辻善之助、平泉澄、中村孝也諸博士その他國史料出身學士、學生諸君の出席があり、凡て會するところ七十餘人、和氣堂に滿ち歡談盡きず本旅行中、樂しみとするプログラムの一だけにまことに愉快な一夕であつた。其より宿にかへり、今度は京都大學出身及び關係先輩の方々の懇ろなる歡迎があつた。芳名を記せば藤井甚太郎講師、岩橋小彌太、飯沼守麻呂、田村勝郎、中西用康、中村一良、徳丸福藏の諸學見であつた。

第三日十月十三日(維新史料編纂會—博物館—湯本)

午前中を虎門にある維新史料編纂會の見學に費す、先づ柴田駒三郎局長の同所沿革・事業に就ての説明あり次いで目下維新史料の世界的に聚集されてゐる現況から、史料稿本の出来る迄の一々についての詳細に亘つて藤井甚太郎氏が實物により御教示あり吾々を益するもの多大であつた。その探訪された先は千百三ヶ所に上ると。別室には特に吾々の爲種々貴重な書類を陳列され、大別すれば大日本維新史料稿本、藩廳記録、皇族記録、公卿記録、書翰類、外國史料等、書翰類の中には興味あるもの多く三條實美、姉小路公知書翰あり又兒島強介が安藤閣老を襲撃の爲出立せんとする際その心得を細々記したのもあつた。就中吾々の興味を惹いたものに近藤勇の寫眞があつた。見るからに醜男で頬はこけ鼻は天井を向いて思ひ掛けぬ貧窮さである。正午此處を辭して豪雨の中を上野博物館に向ひ、途中松坂屋

で中食をとつてうすら寒い博物館内に入る。時間の都合上説明を乞はず各自陳列箱の中をのぞいて歩いた。

午後二時過東京の先輩方々の見送りを受けて、上野發東北地方へと向つた。降る雨は車窓をうら、冷たき風は行く手に吹き増るやうに覺えた。常盤線が福島縣に入つて、間もなく着く、湯本の驛に下車すれば、線路の枕木も浮くかと氣遣はれる大雨に、風吹き荒び、暗夜の驛頭、篠つく白雨が物凄。自動車にかけ乗り、田舎びた湯本温泉の宿に入り、川の岸に宿りたる如き雨の音を聞きつゝ、食事を済せたのは九時過ぎであつた。豪雨の爲明日の白水阿彌陀堂行きの自動車は到底出まいとの話を聞きて不安ながら寢に就いた。電燈が消えて手探りに床を求めたのも思ひ出である。

第四日十月十四日(白水阿彌陀堂—仙台東北大學—松島)

あくれば快晴、一天雲もなく、碧空高く、澄みわたれる秋の日であつた。

白水阿彌陀堂の位置する常磐炭田附近は有名な出水地で本日は晴れたりとは云へ、暗夜の雨の爲道路が水にひたつて居り止むなく車を乗り捨て、歩く、緩驛の西北約五町悪路泥濘を鐵道線路に避けながら西行すれば忽にして一堂宇山を背に安らかな姿を見せる。堂を保管して居る傍の願成寺住職の案内を乞へばこの附近は大字の白水字を廣畑と云ひ縣下でも有名な出水地で縣當局に道路の修補を申し出ても容易に容れられぬ由參詣者も極めて少く附近の人々にも殆んど知られぬ處で我々の京都から

の見學を附に落ぬものとする口吻が見えたが、これこの堂を完全に残した大きな原因でもあらう。堂は近年修理成り外観新しく見え、三間三面の小堂にて屋根は寶形造、柿葺で二軒二重繁樺組は出組を用ひてゐる。外陣格天井、内陣折上小組格天井、各格間長押及周壁等に彩色佛畫の痕跡を留め、天井の金具に特色があるが新に補足されたものが多い。中央阿彌陀尊の台座は最も秀れたもので蓮華は非常に鋭く分厚く刻まれぬてそれが完備し何等の損傷もない、高さ二尺八寸。本尊は高さ二尺七寸五分、年代は平泉の阿彌陀尊と等しく藤原時代のものであるが顔は眼はきつく引締り都はなれた味ひを有つてゐる。後背は一部分は後世の補修にかゝるらしいが飛雲の透彫に飛天を配し優麗にして自由なる誠に藤原藝術の特色をよく傳へたものである。脇土は本尊に比して作も劣り粗雑であつた。

緩驛から汽車で仙台に向ふ途次平驛を過ぎる頃から東北の地色漸く現はれ附近の村落には昔ながらの洞窟を利用した物置が見られ又一丈もある足高の小屋も散見した。

仙台驛頭に喜田貞吉講師の御出迎を受けて直ちに東北大學へ導かれた。先づ新築の法文學部大書庫を見せて戴く、有名なグント文庫の中にこの碩學の手記を見出したのは忘れぬ印象である。狩野文庫の多方面に亘つての夥しい蒐集、殊に錦繪類の良く保存されてあるのに一驚を喫した。屋上に上つてたそがれゆく杜の都の眺望を恣にし次で喜田講師御蒐集及び久原氏寄託のアイヌ關係の石器土器類の陳列の御説明を受けて見學して後同

大學の歡迎茶話會に臨んだ。法文學部長中村善太郎氏の歡迎の御挨拶に續いて西田教授の謝辭あり、列席さるる、同大學の大類竹内、岡崎、土居諸教授、曾我部靜雄助教等全く京都に御縁故深い方々ばかりとて長途の勞も忘れて歡談、時刻迫るまゝに惜しき別れを告げて松島に向ひ松島ホテルに投宿した。

第五日十月十五日(瑞巖寺—五大堂—鹽釜神社—多賀城址

—大崎八幡—青葉城—瑞風殿—一關)

松島灣の日の出は素晴しかった。五大堂を背景に記念撮影をして瑞巖寺を見學する。本堂前面の欄間の彫物は嫌味のない寫實的なものであるが、いかにも柔かく表現され後期桃山時代の特徴をよく現して居る、武者がくしの壁に明暦の年號のある落書があつた。『かきおくもかたみとなるや筆のあと』小部屋で退屈して居る武者の姿がしのばれて面白い。次で五大堂に赴き堂内安置の家形厨子の開扉を特に願つて中の不動尊を拜觀する、像は慈覺大師作と傳へられて居るが時代は藤原前期のもので通常の尊形と異り牙も鋭からず相恰小兒の如く穏かに細部に就いて地方色豊かなものがあるが斯る邊地にあつて珍しき優秀のものである。斯して松島見學を了へモーターボートに便乗して鹽釜に向ふ。途中島々の間を縫ふて約一時間快走する、此の日天氣快晴波靜かで實に愉快だった。工事中の鹽釜築港を左に見て上陸、その儘裏道から鹽釜神社の社務所に入る。中食後同社所藏の古文書、寫本を見學して鹽釜神社に參拜、神前の文治三年泉三郎寄進の燈籠、林子平の獻じた石造日時計等を見て神社を辭

し二百餘級の石段を下り、釜神社に立寄つて往古鹽大神が製鹽の法を教へられた時使用したと傳へられる御釜を見自動車も走らせて多賀城址に向つた。

上代我國の東邊の成りとして鎮守府が置かれ、蝦夷及び妹鞆女眞に對峙し我國運東北發展の策源地であつた多賀城も今は見渡す限り薄の穂なびく一面の枯草丘に變じて了つてゐる、先づ此地の郷土史家菊池氏の案内にて路傍の多賀城碑を訪ねて芭蕉懷舊の情を偲び直ちに内城址に向ふ。周圍約百二十間の長方形の丘陵で、その内の更に小高い所が御座の間と傳へられ礎石が點在する。當日は霖雨の翌日として附近に瓦の露出せるもの多く、紋様のあるものは遂に見られなかつたが、城内に數多の瓦屋根の建物立ち又土壘にも瓦が用ひられて居た事を思はずものがある。其處から西南下し道路の側に横はる弘安十年_亥八月八日の銘ある伏石を見、菊池氏邸に立寄り小憩し多年蒐集された遺物類、地圖等を拜見し、繪葉書、地圖等多種の土産を頂く。次いで丘陵の起伏する野路に東北の秋を思ひつ、高崎廢寺址へ向へば多賀城址と同様の布目瓦と瓶の底とを路傍に發見した。寺趾は金堂、講堂及東塔の礎石が現存し殊に東塔址は高い土壇の上の徑二尺の孔ある心礎の他に十六の礎石が全部舊位置に並んでゐる。大和法隆寺の結構に比せられ、當城鎮護の寺院であつたと説明されてゐる。宮城野原の咽喉を扼し西南方に市川を望む形勝の地であるが、當時都を遠く離れたこの僻遠の地に立籠つて蝦夷地嚮營を志した勇猛さが今更ながら偉大なものとして回顧

された。

多賀城驛に出で、及び仙台市に入り大崎八幡宮にバスを驅らす。社殿は京都の北野神社と共に日光東照宮の基本となつた所謂權現造で拜殿と本殿は石の間によつて連絡され不自然さの感じられぬまで兩者が融合して居る點は北野神社よりもすぐれて居る。欄間裏股の豊富な彫刻に桃山時代彫刻の粹を表し柱は内外共に日光と同じく願望である點京都附近の桃山時代のものに慣れた眼には珍らしい。彫刻にも大分繁瑣の感がある。欄間の中の彫刻には瓜、牡丹、竹、梅等があり、裏股の中には仙人と天女が注意せられた。歸路ふり返つて見るとのしか、る様な前面の屋根も臘塗柱の色の奥深い感じがこの不安を補つてゐる。此處を辭して青葉城は時間迫るまゝ、にたゞ大手門を見る。釘隠しが巨大で非常に古いものが残つて居る。金具には金が塗つてあり、柱の桐の紋には桃山時代の特色をよく示すものが残つてゐた。暮夜迫る頃瑞鳳殿に着く、藩祖伊達政宗の靈廟で生前に建立されたもの、扉その他全面に刻まれた彫刻から柱の長さ迄左右相稱のものは何一つない特殊な建築の由説明者の話である。驛辨當を用意して車中の人となり更に北上一關の石橋ホテルに一泊する。

第六日十月十六日(嚴美溪—達谷窟—中尊寺—毛越寺—

厨川柵址—盛岡城址)

早朝宿を出て自動車で磐井川の溪流嚴美溪に秋色を探る。天工橋上に立てば峭崖對峙して峽瓮の如く、上流瀧見橋を渡れば

瀧壺の深き三丈餘と稱され可憐雌雄瀧、鳴門の渦などが橋から上に眺められて絶景を賞せられる。北上して逢谷窟に着く、窟の左方の岩壁には巨大な磨崖佛が僅に頭部を止めて居る。窟内には毘沙門堂があつて舞台造りとなつて居り側面の高い階段によつて堂内に達すれば内部は藤原の様式を供へるが無骨なる地方色丸出しの諸佛像が並ぶ。都下りの一行早々そこを出て愈々平泉中尊寺に向ふ。附近の地形北上川を差込み周圍の山容はなだらかて京都の東山から八潮の邊を思はずものあり今迄見慣れて來た東北特有の粗雑さ武骨さが消えていつしか京都に歸りついた様なのとやかさが漂ひ清衡が京都文化を移植した心も偲ばれた。寺で拜觀の手續につき交渉を重ねる間先づ辨財天堂に入る。國寶の最勝王經十界寶塔曼荼羅の他に惡路王の所持したと傳へられる無反の毛抜形の太刀がある、之は同形のものとして北海道石狩の古墳から出た事あるも頗る類の少いもので奥羽特有の蕨手の太刀の進化したものとは喜田講師の御説である。同講師は仙台から此處まで同行せられ更に盛岡に於ける準備のため先發される。次で今回の旅行の眼目である金色堂の拜觀に移つた。堂は別に套堂を以て覆ひをされ風雨を避けて居る。中央一間の内陣は阿彌陀本尊以下諸菩薩藤原藝術の粹を凝め金色まばゆく七寶莊嚴の卷柱はこれと相和し渾然として彌陀の世界を眼のあたり現はす如くである、たゞその美にうたれて遠くより思ひのまゝ願ひの満ち溢ふるゝを覺えた。この堂は結構の上から見て初めは極めて小規模の内陣文が出来上り次々に纏ぎ足し

て大きくなつて行たのであらう事は古書に堂一間四方とされ又中央及左右の須彌壇の唐草模様の比較からも判別出来る。本堂については餘り有名であるが、須彌壇中央の本尊彌陀は重光背を有ち勢至觀音兩夾持菩薩と共に非常に秀れた相好であるが、後世箔を押しした爲めや、損はれてゐる。但し京都のものに比較すれば劣つて居る點から京都から持つて來たものではないであらう。それは佛體の所々彫刻に手が抜いてあるのを見て云はれうる。金色堂の價値を一層高める内部裝飾に就いて第一目に入るのほ所謂七寶莊嚴の卷柱で柱脚に金銅製造蓮花の礎があり柱に卷かれた模様帯には螺鈿の優美な寶相華文を現はしその螺鈿細工は非常に細かくとぎ出され連枝紋の表現が極めて力強い。須彌壇中央の格狭間は孔雀と瑞花とを半肉に打抜いた銅板を張つたもので周圍に寶相花牡丹唐草の裝飾があり瑞花は宋時代のデザインを取入れたもの、柔らかき自由なる葉、十文字の線金で藤原時代の代表的のものである。概観すれば金色堂は初めは工藝品の様に小さいもので墳墓の上のチャペルとして作られたものが次第に大きくなつて粗雑になつて行つたものと思はれる。後見返りつゝ、立去り經藏に立寄つて寶物陳列所に戻り佛一字金輪佛を見る、稀に見る人間の類の豊かさをもちその姿態にも生きてある人の美しさの感が深い。紅を差した唇、髪はすき髪で細かく、直線的な怜しい眼、これこそ藤原時代の美人の理想であつたらう。衣が組んだ足の下方に垂れてゐるのは効果的でいづれの點から見ても全く他に類例のない逸品である。鐘

樓の鐘には康永二年の銘があり上部の雲形は倭れて地方のものとし、は稀有なものである。其處から白山社の高台に出て北方衣川柵を遠望して京に似た感を深めながら山を下り毛越寺に行く、荒れた境内の廣さにも往古の盛壇を思ひ、圓盛寺跡礎石近年發掘された墓壇の構造を見寶物殿を拜觀して芭蕉の「夏草や一の句碑を一瞥して平泉驛から乗車、やがてこの旅行最北の土地盛岡驛に着き、先行して準備をして下さつた喜田講師のお迎へを受け直ちにその汽車で蝦夷旅行に立たれるのを見送り盛岡高女の校長菅野氏の東導で厨川の里館に向つた、菅野氏の説明によるとこの里館こそは厨川柵址と考へられるもので、里館の南側にはもと厨川が東流してその川岸三丈餘と云はれ、川岸と里館の柵の間には底知れぬ深田があつた由聞ち南方より攻め寄する官軍を防ぐに最も都合よき要害である。その台地を巾三間位深さ二間程の溝で限つて柵を營んだとするのである。附近の土地は火山灰に覆はれ黒くて柔かであり、一尺五寸内至二尺を掘れば萱の焼灰が柱の焼残りと同時に出て来るが全面に互つて詳細な調査はまだされて居ない。陸奥語記に書かれて居る厨川堀戸の二柵の中厨川がこの里館に當るとすれば、堀戸に當るものが里館の西方七町ばかりの處にあつて大館とよばれて居る。その地勢位置が陸奥語記の事記に合致するものとして従來は大館の方が厨川柵に擬せられて居たが里館の地勢も亦厨川柵として妥當と考へられるとの説明である。次に時間の都合上直ちに安倍館址に向ふ、その主要部は北上川の西岸と奥羽街道の間に位

置し南北に長く本丸を中心に北に北館外館勾當館南に中館南館と並んで居り各の間は深い濠で仕切られて居る。安倍館と云はれる以上もとは安倍氏の居館址であつたかも知れないが、後に種々の人に占據されて形式を變へたらしいがしかし廣く之を考へて見れば東北地方によく見られるチャンの一形式であつて、之を以て強ちに安倍氏の居館址と限るにも當るまい。又これを里館と形の上から見て、地形を極力利用した安倍館如きが眞先に出来里館、大館の様な四角なもの地盤が出来た後に居館として作られるものではなからうか。この見地からすれば安倍館が先に出来て次いで里館大館が出来、或ひは三つ相よつて一つの堅固な陣地を構成したとも考へられやうが兎も角厨川柵址を單に三者いづれかの一であるとは極限するのは無理ではないかと思はれる。夕陽赤く沈むを見て此地を去り花巻温泉に投宿、温泉に長途の疲勞を和らげ、のどかな食事を済ませたのは九時過ぎであつた。

第七日十月十七日（金澤柵址―拂田柵址―上の山温泉）

湯の宿の朝あつき茶の濃さも懐かしい。然し研究旅行には左様な情緒も押し切つて早々に出發したのであつたが何分にも奥羽山脈を横斷して裏日本へ出る長い汽車の旅の爲に横手に着いたのは正午近かつた。偶々演習最中で混雑してゐる町中を自動車飛ばして金澤柵址につく頃それまで持ちこたへた雨雲は遂にくすれて景政功名塚の前を通り辦公宮殿下（今上陛下）御野立所址から四方を望む頃は篠つく雨で展望がきかずその儘頂上

なる八幡神社の社務所にかけて込み貨物を見せて置く。今日は或谷氏と深澤氏の御案内である。寶物としては元久三年の銘ある古鏡蓋附の經筒と、その鐵製の覆ひ、四つ耳瓶等が目新しかつた。雨の上るのを待つて社殿裏の兵糧倉址で今尙發掘される燒米を少々紙に包んでもらつて本丸址に登ると眺望誠に絶佳である。金澤柵の事は餘りにも有名であるから此處には記さないがしかし原形は戰國時代にでも打壞されたらしく造りなほされて今残つてゐる溝は新しくて全く館の形式からは離れて居る。大急ぎで下山し車を飛ばして北上二里半ばかり途中六郷町で後藤宙外氏案内役として參加して下さつた。途中美事なる杉並木の長い／＼連りは興深い旅の印象を強くした。此の道を古人は草鞋脚絆に身を固めて長い旅路を偲んだであらう今は自動車は坦々たる道を全速力で走る。先づ拂田柵址遺物陳列場で柵列の柱根、門柱、布目瓦、土師須惠等に就き説明を受けて構内に發掘された溝に臨めば一間に六本の柱を隙間なく並べた柵の状態が一見明瞭である。柱は平均一尺四方の角材でいづれも柵である。そこより南門址に至れば四本づゝ三列に並んだ巨大な門柱根が完全に保存されてゐる。外城を入つて内城に當る中央の長森の丘にかゝる所に墨石の残りが見られてあつた。丘を越えて内城の門址を見て引返す。先刻の豪雨のため發掘ヶ所が水浸しになつて傘の先で柱の位置を確かめる人もあつた。今迄の調査によると柵の東北隅が燒けて修繕の模様なき事から見て其處が燒き拂はれて陥落すると同時に捨てられたものらしく、この拂田柵

が地形に占據した陥圓形のものであり、居館の形式も残つて居ない事、況や城としての形式も亦名稱も残つて居ない事から奥羽柵植時代に一時的に軍陣として立て籠り間もなく捨てられた程度のものであらう。此種のもの、今後の發掘も豫期される。現在附近一帶に耕地整理が完成して昔の面影をさぐる手だてもないが昔は鞠子川に沿ふて長淵川が南側を流れて居たとば後藤氏のお話しであつた。斯くて行程は滞りなく終了した。其夜は上の山温泉にひたつて、七日間に互る長途の旅の疲れを休め翌十八日朝食も遅く湯の宿らしい長閑さを味ひ、遂に南下、上野驛で解散した時はすでに夜も半になつてゐた。(安齋二郎)

讀史會例會

例會 四月二十四日午後六時半より樂友會館にて開催、來會者三浦教授其他二十七名、左の講演あり。

- 平安より鎌倉へ 末 森 量氏
- 城米運漕に就て 原 與 作氏
- 印度ゴアに就て 橋 川 正氏

例會 五月二十九日學生集會所南室に於て、午後五時半先づ晚餐を共にし左の發表に移る。會するもの三浦教授其他五十五名に上る。

- 品部雜戸考 福尾 猛市 郎氏
- 佛師定慶に就て 武 藤 誠氏
- 近世の造船 三 品 彰 英氏

例會 六月二十六日樂友會館に於て午後六時半より開催、中村助教授其他三十名出席左の發表あり。

聚落の發達と井戸

魚澄惣五郎氏

神皇正統記

中村直勝氏

例會 十月六日午後六時半より樂友會館にて開催。中村助教授外二十一名出席、左の發表あり。

淀川過書船

佐藤良二氏

鎌倉幕府政治様式の變遷

藤直幹氏

例會 十一月十日午後六時半より樂友會館に於て開催、來會者四十五名、西田教授中村助教授出席さる。

山鹿素行の歴史研究

肥後和男氏

大阪城竣成記念展覽會

出陳の新史料に就て

西田直二郎氏

西洋史讀書會

例會 六月十二日(金)午後六時半より樂友會館第一號室にて開催、出席者十六名、左の紹介、研究發表ありて後歡談しげしの後散會。

一、シエトツクマンの「二十世紀に於けるゲーテに就いての批判」

二回生 中村勤君

一、ゲーザルのモナルキエに就いて

三回生 松屋友次君

例會 十月三日(土)中原興茂九郎講師歡迎晩餐會の後、樂友會

館第五號室にて開催、左の紹介、研究發表後散會、出席者二十一名、

一、Pelham, Tib. Graecus als Sozialreformer.

井上智勇君

一、ラガシユ國王ウルカギナの社會改革に就いて

中原興茂九郎君

例會 十月二十日(金)午後六時半より樂友會館第一號室にて開催、本日は珍しくも一回生数名の出席をみたのは喜しいことであつた。左の二君の所感並に研究發表後討論に時の過るを知らず。蓋し二君の發表されしもの、性質の然らしめたのもである。出席者二十三名、散會十一時。

一、所感「教授「唯物史觀批判」の批判」

二回生 杉本克巳君

一、アテナイ國家と在留外人

村田數之亮君

明治史研究會

第十八回例會 十月二十九日午後六時半より樂友會館にて開催折から來講中の藤井講師を迎へて牧教授以下二十一名出席、左の講演あり十時半散會。

一、明治維新に於ける階級關係の變化

樫村壽一君

一、明治法制史(第一回)

牧健二君

一、英國に於ける明治維新史研究の資料

藤井甚太郎君

第十九回例会 本月は大會舉行の豫定なりしも種々の都合に依り取止、十一月十七日例會に先立つて六時より藤井講師歡迎晚餐會を樂友會館に開く、西田、牧兩教授、藤井、藤兩講師以下十七名出席、七時より例會開催、同じく諸先生以下二十一名出席、左の講演ありて十時半散會

一、白峯宮造營の経緯

徳重 淺吉君

一、民權論華やかにし頃

藤井甚太郎君

民俗學研究會

例会 九月二十八日 百萬遍かぎや茶舗樓上にて六時半より開會。西田教授以下二十四名出席。左の講演を聞く。

一、伯耆岡成の民俗

天野 重安君

一、Stasiun と北方博物館

梅原末治君

例会 十一月十六日 樂友會館第六號室にて七時より開會。西田教授以下二十三人出席。

一、山海經に現れたる山嶽信仰の基本的觀念について

水野 清一君

講演終了後わが研究會の今後とるべき計畫として

一、雜誌或はパンフレット型として定期刊行物を發行すること

こと

二、研究手段として原書の購讀をなすこと

右につき相談をなすも時間已に遅く決定には至らずして具體的なることは委員附託次會報告として十一時すぎ散會。

例会 十一月三十日。樂友會館第一號室にて、七時より開會。西田教授喜田講師以下三十五人出席。左の講演を聞く

一、神武御東征物語の原形態について

三品 彰英君

右終了後相談會に入り、先回のつゞきとして木村委員まづ雜誌出版に要する費用の具體的説明あり維持會員普通會員の設定につき協議、雜誌の名稱をば「民俗叢誌」となす事を決し實行委員肥後・數田・木村・大橋をあげて尙詳細を決する事になす。講讀者につきては B. Malinowski: Crime and Custom in Savage Society を各週に行ふこと、決す。散會十一時十分。

會報

寄贈交換圖書

- | | |
|-------------------|----------|
| 國學院雜誌 三七の一〇、一一、一二 | 國學院大學 |
| 經濟論叢 三三の四、五、六 | 京大經濟學會 |
| 史苑 六の六、七の一 | 立教大學史學會 |
| 史學 一〇の三、四 | 三田史學會 |
| 史蹟名勝天然記念物 六の一〇、一一 | 同保存協會 |
| 史學雜誌 四二の一〇、一一、一二 | 史學會 |
| 史迹と美術 一一、一二、一三 | 史迹・美術同政會 |

史潮 一の三

大塚史學會

(右紹介 西田直二郎氏)

歷史地理 五八の四、五、六

日本歷史地理學會

富山高等學校

(右紹介 岡本 基氏)

考古學雜誌 二一の一〇、一一、一二

考古學會

大阪市東區北濱二丁目

(右紹介 田中吉太郎氏)

安宅喜太郎氏

背丘學叢 四、五

背丘學會

大森寅之進氏

民俗學 三の一〇、一一

民俗學會

東京市麴町區三年町一

(右紹介 藤井甚太郎氏)

維新史料編纂事務局圖書課

人類學雜誌 四六の一〇、一一

東京人類學會

奉天信濃町

ワルター・フックス氏

國史學 八、九

國史學會

京都帝國大學文學部史學科

波部 武氏

邦文西洋史文獻展覽目錄

東北帝國大學史學會

京都府左京區下鴨松ノ木町

織田 武雄氏

乾隆年間準回兩部平定得勝圖

上田 恭輔

名古屋溫古會

(右紹介 島田貞彦氏)

尾張國遺存織田信長史料寫真集

名古屋溫古會

○退 會

大村正之氏

日名子犬郎氏

日本文化叢考

京城帝國大學法文學部

武藤 長藏

森田博三氏

日英交通史料六、七(抜刷)

武藤 長藏

同 上

同 上

廣東十三行圖說(同)

同 上

同 上

同 上

牛津大學經濟學教授候補者としての「アツシユレー」

同 上

朝鮮古蹟圖譜 十一

朝鮮總督府

大正十二年度古蹟調査報告 第一冊

同 上

同 上

同 上

大正十三年度古蹟調査報告 第一冊

同 上

同 上

同 上

●會員動靜

入 會

京都市上京區寺町通今出川上ル三丁目

池田 源太氏

同 上京區新烏丸通頭町

原 興 作氏